

JELA NEWS

ジェラ ニュース 第49号 2019年8月15日発行 発行責任者 渡辺 薫

一般社団法人日本福音ルーテル社団 〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-20-26 Tel.03-3447-1521 Fax.03-3447-1523 jela@jela.or.jp www.jela.or.jp

難民支援／世界の子ども支援／ボランティア派遣／リラ・プレカリア(祈りのたて琴)／奨学金制度／宣教師支援

私たちは、キリストの愛をもって、日本と世界の助けを必要とする人びとに仕えます

お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。 マタイによる福音書25章35～36、40節



難民シェルター板橋ジェラハウスがリニューアルオープン！

この号にはこんな記事が…

【P2-3】難民支援の足跡と板橋ジェラハウス改築の意味／JELAハウス「TOKIWA(トキワ)」からのメッセージ(渡部清花)
【P4】元気もりもり森 一樹のブラジル派遣記／カンボジア・ワークキャンプ 2020 募集要項 【P5-7】インド・ワークキャンプ
2019 感想文集 【P8】JELAハウス管理人募集／川柳ひろば／支援者一覧／編集後記 ほか



2019 年 4 月、日本福音ルーテル社団(JELA＝ジェラ)が東京都板橋区に所有する難民シェルター「ジェラハウス」が改築工事を終え、シェアハウス型のシェルターとして生まれ変わりました。まずは 3 年間のシェルター運営管理者として、難民の就労支援を行う NPO 法人 WELgee (ウェルジー) が JELA の新しい同労者となりました。再出発の今、JELA の難民支援の軌跡をふりかえります。

■民間初の難民シェルター

JELA の難民支援事業の歴史は、今から 35 年前、1984 年にさかのぼります。日本において難民条約・議定書(1967 年の難民の地位に関する議定書)が発効したのが 1982 年ですから、はからずも、日本国内における難民支援の草創期に外務省からの要請に応えるかたちで、JELA は難民支援の先駆的役割を担うこととなりました。

JELA が支援する人々は、人種・宗教・政治的意見等を理由とする迫害のために、自国を離れざるをえず、かつ、来日し日本での保護を求める機会をえた難民の方々です。

難民支援の始めから、JELA は積極的に政府や NGO からの意見を集約し、やがて、「衣・食・住」の「住」を支援する重要性に着目するようになりました。難民申請者が経済的自立を果たすまで安心して滞在できる場所は、時代の要請でもあったのです。

そこで、満を持して 1991 年、JELA は民間初の難民申請者入居用シェルター「ジェラハウス」(板橋区)の運営を開始しました。ジェラハウスでは、住居の無償提供(水道光熱費を含む)を中心とし

た支援が行われます。その需要は高く、2011 年、2 つ目のジェラハウス(江戸川区)の運営が始まりました。都内 2 か所のジェラハウスの部屋の総数は 17 部屋。各部屋に空調設備、寝具、食器、調理器具などの生活必需品が完備され、各個人や家族が個室で久しぶりの安心を手にすることを可能にしました。同時に、日本人の管理人が常駐することで、入居者のリクエスト、緊急事態発生時に迅速な対応が出来る仕組みが構築されました。また、ボランティアによるジェラハウス入居者への日本語レッスンも、JELA が力を入れてきた支援の一つです。

■「希望格差」という壁、WELgee との出会い

しかし、28 年に及ぶシェルター運営の希少価値を自負しつつも、JELA はある課題を「壁」と感じるようになっていました。それは、入居した難民の方に「住」の先、つまり、そこを起点として、次の人生に一步踏み出すための希望、活力を届けるにいたっていないのでは、という問題意識です。事実、ジェラハウス運営の年月は、「ジェラハウス後」に希望を持たず定住化せざるをえない人々と、まんじりともせず屋外で夜を明かし、入居の順番を心待ちにする人々との葛藤の日々でもありました。近年はその傾向がさらに高まっています。善と思い提供した環境が、かえって入居者本人を社会から孤立させ、シェルターの外に広がる経済難などへの恐れを抱かせかねない現実に直面しました。

もとい、シェルターの外への恐れの理由は、実は、経済格差や機会格差といった数値化されるものではなく、いわば「希望格差」と表現されるべきものかもしれません。この格差を解消するために、祝された「出口」を提供するために、神様は JELA をどのように用いられるのか… JELA 事務局

にそのような思いが高まる中、2016 年、WELgee との出会いがありました。WELgee は、難民個人の背景や就労意欲、スキル向上を自分ごととして捉え、難民の方々が日本や世界へのキャリアパスを獲得するための伴走者として活動する NPO 法人です。改築された板橋ジェラハウスは、管理者に WELgee スタッフを迎え、滞在とともに就労支援を受けられるというユニークなシェアハウス型難民シェルターへと変身しました。これが、JELA の「壁」に対する答えの一つとなりました。シェルター入居者の「次」のために伴走する WELgee の存在が、入居者に希望と活力を与えてくれることに期待しています。

■ニックネームは「TOKIWA」

このシェルターに WELgee が名づけたニックネームは「TOKIWA(トキワ)」。

彼らは、手塚治虫氏など著名な漫画家を多数輩出したトキワ荘に想をえて、入居者が難民という枠を超えて夢に向かって切磋琢磨する未来を TOKIWA という名前に込めたいのだ、と力強く語りました。

JELA がキリスト者としてこの名を目にすると、そこには新鮮な驚きがあります。「TOKIWA＝ときわ」は漢字で「常盤」と書き、「永遠に変わらない岩」を意味するからです。キリスト教の聖書では、「岩」はしばしばイエス・キリストを示す言葉として用いられます。WELgee の思いがこもった TOKIWA という名が、はからずも、永遠不変の神に思いをはせる言葉と重なったことで、TOKIWA が神に喜ばれる場所として、入居者の将来を祝する場所として用いられてほしい、という祈り心が JELA の中にも新たに起こされています。



JELAハウス「TOKIWA」からのメッセージ

「I think I can turn impossible into possible(不可能を可能にできる気がする)」

NPO法人WELgee 渡部清花



4 月の祝福式を経てオープンした板橋のジェラハウス「TOKIWA」。5 月には家具が揃い、20 代後半の 2 人の入居が正式に決まりました。JELA との協働事業として、運営に携わらせていただいている WELgee から、オープンからの日々について書かせていただきます。TOKIWA は、日本に逃れた難民たちが、自分らしく働く最初の一步をつくるシェアハウス。仲間たちと切磋琢磨しながら、自分の目標に向かって努力しながら過ごすことで、日本社会への一步を踏み出せるように設計されています。入居からの 9 ヶ月間を目安に、安定した就職という卒業の形を目指します。

■「TOKIWA」の生活

多くの難民申請者が直面するように、今の入居者も、入居前は家賃や水道代の支払いのためのアルバイトで日々が追われ、人との関わりも非常に限られていました。本格的に未来設計をするためには、アルバイトを減らして、自分にあった就職活動を始める必要があります。「爆弾は落ちてこないよ、でも人間として生きている心地がしない。」日本に逃れてきた若者たちが直面するのは「目標に向かうことのできない状況」でした。不安定なアルバイトや契約もない状態での日雇い労働の現状を抜け出すための時間・余裕がなかった時点から、ジェラハウスへの入居で、一步を踏み出すことができました。

目標達成のためには、具体的な目標設定が必要です。入居希望者は全員、プレゼンテーションをし、これまでの努力の姿勢・日本語力・その他スキルの学習歴・入居中の計画・異なる人と共に協力しながら暮らすことに対する合意などから総合的に判断します。時間はかかりますが、重要なプロセスです。

TOKIWA での日々では様々な経験をしてゆきます。就職活動のオリエンテーション、自分のスキルを高めるための勉強、日本語力の向上、レジュメ・職務経歴書作成、面談に向けた自己分析・企業研究……キャリアコーディネーターの伴走も重要ですが、自分の努力と行動も必須です。

TOKIWA での試みを 2 つ紹介したいと思います。

■World Ambassador Program

自己理解と表現スキルを身に付けるためのプログラムです。自分の考えを相手に伝える方法、自分が「できること」「したいこと」「しなくてはならないこと」の整理、就職の面談での長所の伝え方、友人との信頼関係の構築…専門性を持ったファシリテーターが提供するプログラムを通し、人とのコミュニケーション構築の基礎も学びます。「I think I can make impossible to possible. (不可能を可能にできる気がする)」というのは、このプログラムを受講したあるアフリカ出身の方の言葉でした。

■先輩訪問

すでに自分のスキルや専門性を活かして働く先輩たちが、TOKIWA を訪問してくれます。「日本に来たばかりの時はどうしていた?」「どうやって今の仕事に繋がったの?」「いま、頑張っていることはなに?」「将来やりたいことは?」迫害、弾圧、紛争、徴兵、差別などにより、一度は途切れてしまった人生の目標があるかもしれません。揺れ動く世界情勢の中で、本人の意思ではどうにもならない壁にぶつかることも。数年前に日本に来て、すでに頑張っている先輩たちとの関わりは、大きな励みとヒントになっています。

■「TOKIWA」での出会い

自己鍛錬と就職活動に集中するため

全員に個室があります。設計図段階で JELA と議論し工夫をしたのは、必ず共有スペースを通して個室に入る間取りにしたことです。キッチンもダイニングテーブルも共有スペースに。料理をしつつ何気ない会話をする時間、その日の出来事を共有したい時に「おかえり」と言ってくれる人がいる瞬間、違う国から来た仲間が頑張る姿を見て自分も前向きになれる夜。目標に向けて切磋琢磨する仲間が同居することの意味は、法的・制度的な壁だけでなく社会的な壁も越えてゆくために、喜びを共有し、辛い時にはじっくりそっと励まし合えるところにあります。

■TOKIWA のこれから

一方で、異なる人が共に暮らす中には、想像を越える面白さもハプニングもあります。掃除の感覚、ゴミ出しルール、真逆の就寝時間、音楽のボリューム……これらの「違い」が生まれるのは文化や言葉だけが理由ではありません。人が 2 人いたら、すでに異文化の始まりです。お互い気持ちよく暮らすには何が必要か。社会の縮図のような TOKIWA では、今後生活の中での大事なルールを入居者で話し合って決めてゆくこともあるでしょう。

私たちの役割は、難民として日本にやってきた人々の友人・家族として、志と可能性への道のりに伴走すること。「難民」という背景を超え、誰もが「自分らしさ」を活かしながら、未来を作って行ける社会を TOKIWA から作ってゆきます。始まったばかりの取り組みですが、JELA の丁寧な関わりを始めとして、だんだんと輪が広がっています。どうぞ引き続き、応援よろしく願いいたします。

NPO 法人 WELgee(ウェルジー)

【HP】welgee.jp

元気もいもい森 一樹の ブラジル派遣記



JELA の国際青年交流奨学金を受けて、今年 3 月からブラジル・サンパウロ教会でボランティア研修生として奉仕活動をおこなっている森一樹さん（日本福音ルーテル市ヶ谷教会）から活動報告が届きましたので、ご紹介いたします。



「3つの想い」

はじめに、私がブラジル行きを決心した3つの想いについて書かせていただきます。1つ目は、社会奉仕に対する想いです。この想いが芽生えたのは、2018年2月に参加した「JELA カンボジア・ワークキャンプ」でした。ボランティア活動を通して気付いたことは、本当に人々の助けになるような働きをするには、専門的な知識・技術や、支援できるだけの経済力、そして何より、そのために費やす時間が必要だということです。帰国後、専門的な技術や経済力も

ない今の自分に捧げられるのは、今という「時間」なのではないかと考えるようになりました。残り 1 年となった大学生生活の今後について、就職のみを考えていた私に、自身の時間を捧げ、社会奉仕をしたいという想いが与えられました。

2つ目は、神様にもっと仕えていきたい、という想いです。私が所属する市ヶ谷教会では、青年のみで礼拝の奉仕をするユース礼拝や、ルター派とは異なる教派の青年を招いて親交を深める活動が盛んに行われています。母教会の青年活動に加え、東教区青年会（ルーサーリーグ）の役員として教区の青年同士の交わりを深める働きや、昨年の夏に実行委員長を務めたルーテル教会の全国青年修養会の企画・実行にも携わらせていただきました。そのような青年活動を通して与えられる恵みや、自分のように小さく弱い者でも用いてくださる憐れみ深い神様に仕えていく喜びを、次第に強く感じるようになりました。

また、そういった想いが強くなっていく一方で、3つ目の想いである、語学留学への想いも捨てきれずにいました。大学入学以来、英語の他に他の言語を学ぶために留学できたらと考えていましたが、実現に至りませんでした。

以上のような3つの想いを抱きつつ、お祈りしていたところ、以前に JELA からの支援を受けブラジルに派遣された青年達と出会い、当時の話を聞く機

会が与えられました。ポルトガル語を学びつつも、教会のために、またサンパウロの日系社会のために奉仕をするというその派遣内容は、社会奉仕に対しての想いと、神様に仕えていきたいという想いを強く揺さぶりました。もうそのプログラムは終了していて、志願者がここ最近では居ない事も聞いていましたが、こんな機会は今後ないと考え、一か八か、サンパウロのルーテル教会や JELA に掛け合い、進めたところ、大変ありがたい事に道が拓け、ついにブラジルの地に立つことができました。

（＜JELA NEWS 50 号＞につづく）

（森 一樹）



2019 年 2 月 13 日ゲアルーリョス国際空港到着時。徳弘牧師と。



インド・ワークキャンプ参加者レポート

2019 年 2 月、JELA はインドの CRHP（注）でワークキャンプを開催しました。義足製作を中心とする 11 日間のプログラムに、十数名の方がご参加くださいました。今回は参加者 10 人のレポートのエッセンスにあたる部分をご紹介します。

なお、全レポートの詳細は、JELA ホームページのニュースブログ記事「インド・ワークキャンプ 2019（←ご検索ください）」からもご覧いただけます。

<http://jelanews.blogspot.jp>

（注）CRHP＝“Comprehensive Rural Health Project”の略で、総合的地域健康プロジェクトを意味するインドのキリスト教系非営利活動団体です。



お祈りでみんなの心がひとつに
前久保 可南子

私は、プロテスタント系の大学に通っていますが、家の信仰も特になく無宗教です。そのため、大学で初めて聖書を買いい、お祈りの仕方、キリスト教について授業で学びました。今回のワークキャンプはキリスト教の精神を学ぶことも目的とされており、この 10 日間は私にとって、生まれて初めてに近い、キリスト教の精神にじっくりと触れた期間となりました。

食事の時のお祈りや礼拝、デボーション、その度に神を意識し天に想いを馳せました。みんながひとつの思いを胸にお祈りをするたびに、一体となれている気がしました。ずっとはしゃいでいた仲間が、お祈りになると静まり、祈っている姿が新鮮でした。礼拝や、時々ご飯が一緒になるスタッフの方とお祈りをしたときは、国籍を超えてお祈りでみんなの心が一緒になれるという不思議な感覚を味わいました。

覆された偏見
家入 大介

スラム街に行った際、自分にはどこか不安な気持ちがありました。スリに会うのではないか、お金をせがまれたらどうしようかと考えていました。日本人なんて相手にされないと少し偏見を持っていました。しかし、実際に行ってみるとそんな考えが自分の大きな間違いということにすぐ気づかされました。



奉仕を通して霊的に成長
殿村 真弥

今回のワークキャンプは、自分にとって忘れられない経験になりました。キャンプの目的は、奉仕活動を通して、人間として成長することでした。去年はアメリカでのキャンプに参加しましたが、アジアでのキャンプは初めてで、このキャンプは私にとってとても新鮮であり、一方でそれがどのようなものであるのか想像し難いという不安も同時に感じていました。

インドでのキャンプを終えた今、無償の奉仕をすることで得られる霊的な成長、そしてこれが人としての成長にも繋がることを知りました。今後はこの経験を常に意識し、無償の愛を他人に与えることができる生活と、そのような人間になるように尽力しようと思います。もし機会があれば、またこのキャンプに参加したいです。



確かに、スラム街は自分が暮らしているような環境とはかけ離れています。しかしそこに住んでいる方達は自分と何ら変わりませんでした。むしろ、見ず知らずの私達に生活の一部を見せてくれたり、写真を撮ろうと話しかけてくれたりと、とても温かい人ばかりでした。自分だったら知らない人に家の中や生活の一部を見せるなんてしたくないし断るかもしれません。街に出てもチャイをサービスしてくれたり、結婚式で自分たちを歓迎してくれたりと多くの方達が受け入れてくれました。そんな彼らに感謝の気持ちと、偏見の目を持っていたことに対しての反省の気持ちでいっぱいです。



愛と笑顔をもたらしたキャンプ
原田 裕子

CRHP のキャンパスには幼稚園があり、スタッフが隣にある貧民街の各家庭を廻って、園児を連れて来る。ある朝、私



カンボジア・ワークキャンプ 2020 募集要項

- ①日程： 2020 年 2 月 12 日(水)～ 22 日(土) 11 日間
- ②対象： キャンプ実施時点で 18 歳以上の健康な方(高校生不可)
- ③募集人数： 5 名～ 10 名程度(人数調整のため選考があります)
- ④内容： 現地の団体の活動支援と交流、学校校舎修復や設備設置、キング・フィールド等の歴史的に著名な土地や博物館訪問など。
- ⑤参加費： 12 万円
＊海外旅行傷害保険、パスポート申請の費用、説明会会場(JELA)と出発・帰国時の集合場所(成田空港)から居住地までの交通費や、前泊・後泊する場合の宿泊費用については、上記の参加費とは別に全額個人負担となります。
- ⑥申込方法： 別紙「申込書」に、必要事項を記入の上、JELA カンボジア・ワークキャンプ係まで、下記の方法でお申し込み下さい。
- ⑦締切： 11 月 30 日(土) 必着 (12 月 4 日までに参加の可否をお知らせします)
- ⑧参加者説明会： 2019 年 12 月 7 日(土) 13:00～17:00
場所は JELA ミッションセンター 2F(東京都渋谷区恵比寿 1-20-26)
※参加者のご都合により日程等を変更する場合があります。
- ⑨問合せ・申込： JELA カンボジア・ワークキャンプ係
メール：jela@jela.or.jp TEL：03-3447-1521 FAX：03-3447-1523

■参加にあたっての注意事項

- (A)行程・プログラムは、現地の受け入れ状況、天候、その他の都合により変更することがありますので、あらかじめご了承ください。
- (B)カンボジア入国の際、パスポートの残存期間が6ヶ月以上、余白2ページ以上ある必要があります。
- (C)このワークキャンプは、あくまでも参加者個人の責任で参加していただきます。JELA からの同行スタッフは、ツアーをコーディネートし、安全と健康について十分配慮いたしますが、万一の怪我、病気、不慮の災害・事故に備え、「海外旅行傷害保険」に必ずご加入いただき、安全管理は参加者の責任において行ってください。
- (D)予防接種に関しては個人の判断と責任になりますので、各自で医師に相談・確認してください。外務省と厚生労働省の予防接種情報も参考にしてください。

■必須事項

- (A)期間中、協調性を持って同行スタッフの指示に従い、行動、健康に関して自己管理してください。(体力が必要ですので、健康状態等にご心配がある方は応募前に必ずご相談ください。)
- (B)海外旅行傷害保険に必ず加入してください。
- (C)参加者説明会にも必ず参加してください。
- (D)帰国後十日以内に報告書(電子メールが基本)を作成して必ず JELA に提出してください。この内容は編集の上、ジェラのニュースレター等に掲載されます。

たちをその貧民街に案内してくれた。
その街に入ると、まっすぐの道があり、その両側に家が並んでいる。道の両端に下水用の溝が掘られてあるが、フタが無い。しかもそこに住む人の中には、下水をそのままトイレとして使っているようだ。もっと驚いたのは、イノシシが、その下水をあさっていて、子供まで産んで住みついていることだった。各家庭を周ると、大人も子供も沢山いる。「ナマステー!」と挨拶すると、笑顔で手を振ってくれる。街の奥に行くほどに、もっと貧しい家が並ぶ。その男性たちが畑に仕事を求めて行くが、この三年以上も雨が降らず、干ばつが彼らの生活をもっと貧しくしている。
朝、迎えに行った園児たちと一緒に歩いている時、大きな瞳でニコニコしながら、何のためらいも無く、小さな手を私たちの手にからめてきた。温かなかわいい手。その大きな笑顔が、緊張していた私の心に光をとめてくれた。この十日間、私が何を与えたと言うより、知り合ったインドの人々や仲間たちから、多くの愛と笑顔をもたらしたワークキャンプでした。



共に祈ることの素晴らしさ
三浦 ことの

CRHP が支援している農場で聞いた話で、とても考えさせられることがありました。それは、手を洗うことを推奨し教える時に、衛生面からでは説得できないということでした。手を洗うのに使うお金で、いくらのお食料を買えるのかということを考えるそうです。これは

切実な問題だと感じました。私は手が汚れていたら洗いたいと思うし、自然とそうする癖がついています。私の生活との大きな違いを知り、切なくなりました。手を洗うことは、衣食住の上で安全に過ごす大切なポイントだと感じます。CRHP の幼稚園を見学した時に、子ども達の日課として歌で手を洗うことを教えていました。これは、手を洗うことを子どもに習慣づけるために、大きな意味があると思いました。
このキャンプでは、祈る時間が毎日与えられました。活動をしている中で、神様からの多くの導きがあったと思います。私には理解できない現地の言語で祈ることがありました。しかし意味は理解できなくても、心を合わせて共に神様に向かうということには変わりないと感じました。共に祈ることの素晴らしさを改めて感じ、また、その出来事に喜びを感じました。これはきっと世界中で感じられることではないかと思います。そうであってほしいと願います。また、円になって祈る場面もあり、私たちが繋がって祈ることは心から素晴らしいと思いました。



素敵な仲間と共に
井上 祐子

「見よ!兄弟が、共に座っている。何という恵、何という喜び」という讃美歌をワーク後のデボーションの時に、チャプレンの嗣先生（日本福音ルーテル千葉教会の小泉嗣牧師）のリードで何度か歌いましたが、私は「このキャンプそのものが、これを地でいっている」と思いました。そして、CRHP が予定していたワークが、全員でうまく行え

たことがとてもよかったです。
一緒に行った 12 人の仲間が、とびきり素敵でした。皆、思いやりの心があって、一生懸命働き、どの一瞬も楽しそうでした。食事を待つほんのわずかな時間も、みんなで次から次へというんなゲームをしました。食事の時は、その都度テーブルマスターが指名され、その方がお食事の席順とお祈りを取り仕切るというシステムでしたが、席順は出身地別、誕生日の早い順などいろいろな方法で決められ、一度も前と同じことはなく、いつもドキドキハラハラで楽しいお食事でした。どの方も心優しく、空港内とか、市場とか、人混みの中を歩いているとき、気が付くと、歩くのが遅い私を気遣って、誰かが必ず後ろにいてくださいました。



子供たちの将来
井上 秀樹

今回の最大の楽しみはミーナ先生に再会することでした。ミーナ先生はCRHP の保育園の園長さんです。ミーナ先生の 1 日は、朝、近くのスラムの子供たちを家までお迎えに行くことから始まります。どうしてわざわざ家まで迎えに行くかという、そこに行ってその子供達の家族の状況を実際に見、時にはアドバイスもします。また、子供たちだけでなく、近所の人達と会ってよく話を聞きます。体の具合が悪い人がいれば、症状をよく聞き、必要であれば病院へ行くようにアドバイスします。スラムの人たちはお金がないのでなかなか病院へ行こうとしません。で

も CRHP の病院は、そういう人たちの負担にならないように、安い費用で診療を受けられるように考えています。
保育園に来る子供たちは、毎朝、ちゃんとシャワーを浴びてから来るように躰けられていますし、服装もちゃんとしています。食事も保育園で毎日 2 回与えられますので、栄養不良でやせ細った子はいません。皆元気で楽しそうです。保育園を出てから、この子供たちがどんな風に成長しているのか、とても興味があります。



患者の方々のために
安藤小泉 海

義足作りもとても印象深い経験になりました。私が体験した工程は、患者の足を採寸し、アルミの板を切り出し、整形する、というものでした。どれも慣れるまではとても難しく、苦勞しました。患者の方々に見守られての作業だったので、実際に今自分が作っている義足を使う人が目の前にいるということにとても緊張しました。
また、すべての義足が出来上がり、それらを患者の方々に贈呈する会がありました。どの方もとてもうれしそうに受け取ってくださり、そのことにこの上ない充実感をおぼえつつも、満足な医療が受けられないために、たくさんの人が義足を使わなければならないということも同時に考えさせられました。



絶望から明るい気持ちへ
廣瀬 知登

CRHP の幼稚園の子供たちと先生との出会いは大きな喜びでした。キャンプの中で幼稚園に通う子供たちが住むスラム街に行ける機会がありました。僕がそこで感じたことは、絶望というような感情に近かったかもしれませんが、日本には無いような劣悪な衛生環境、干ばつの影響で職をなくした人、子どもたちを十分に学校に通わせることができない家庭環境などはとても酷かったです。しかし、CRHP でワークをして、幼稚園で子供たちと遊び、スラム街について話を聞くうちに、少しずつ気持ちは明るい方向へと導かれていきました。
幼稚園でのワークを通して気持ちが変わったのは、幼稚園で働く先生が本当に子どもたちのことを思って働いていたからです。その先生は、スラムの子どもたちが住む環境を良くするために、子どもたちを迎えに行く際、その子たちだけでなく、家族の健康状態も確認しながら回っていました。スラムのためにも働く先生を見て、子どもたちに未来を感じて、明るい気持ちへと変わりました。
インドで感じたことは、文章に表すことがとても難しかったです。この感想文を読んでいただき、インドが気になった方はぜひインド・ワークキャンプに行ってみてください。



日本も抱える問題
高尾 楓花

スラムで聞いた話は本当にショックで、初めは受け入れることが出来なかった。どうしてこのような状況になるのか、と疑問であったし、事情を聴くと何を解決すればなくなるのだろうかと分からなくなってしまうものであった。この環境に置かれている子どもたちの状況は残酷であると考え、このような怒りはどこで解消できるのだろうかと落ち込んだ。
しかし、日本に帰ると、小学生を虐待し、死にまで至らしめた父親と、それを防ぐことが出来ず子どもを守れなかった大人のニュースが世間をにぎわせていた。それを見て日本も同じ問題を抱えているのだと感じた。件数は違うであろうが、同じ思いをしている子どもが日本にもいる。スラムで目の前で残酷な事実を知り、スラムだけで起こるものと勝手に決めつけていたが、日本も抱える問題であった。
将来は、子どもと関わる仕事を目指している。今回の経験を通して、より一層、つらい思いをしている子どもに寄り添い助けることのできる人間になりたいと強く思った。スラムの子どもに対して自分のできることはなかった。しかし、将来自分がかかわる子どもにはこのような悲しいことが起こらないように自分のできることをすべて注ぎたい。

JELA の難民シェルター管理人募集中

JELA が都内に保有する難民用シェルターハウスの住み込み管理人を募集しています。難民支援に興味のある方は、8月25日までに JELA (jela@jela.or.jp) へ、件名に「管理人希望」と明記の上、メールでご連絡ください。詳細はご連絡をいただいた方にお伝えいたします。

【募集要項】

- 募集：1名
- 所在地：東京都江戸川区内
- 業務内容：難民用シェルターの管理人として、居住者へのゴミの出し方、ガスの使い方、家電製品の使用法や清掃の指示など、また新規入居者への設備使用の説明、緊急の対応。月に一度の JELA (東京都渋谷区) への報告有り。

■報酬：管理人部屋 (1R・バス・トイレ・キッチン有) の無償提供・水道光熱費の免除。謝礼金有。

■資格：成人の方で、難民支援や外国人に抵抗のない方。健康に自信があり、英語での簡単なコミュニケーションが取れる方が望ましい。



支援者一覧

(2019年2月1日～2019年5月31日)

安藤淑子 / 池田哲也 / 石澤とし子 / 井上新 / 大塚真佐子 / 大嶺愛持・裸覇武・十六夜 / 柿沢純江 / 金子佐年 / 北川勝弘 / 倉知延章 / 小泉小枝 / 小坂敦子 / 小島拓人 / 小松由美 / 佐々木裕子 / 佐藤たか子 / 島宗正見 / 鈴木辰典 / 杉浦りえ / 聖望学園高等学校 / 高橋要子 / 高橋竜太 / 田山かほる / 千葉ちづ子 / 辻裕子 / 中川浩之 / 中山康子 / 仲吉智子 / 西垣親子 / 西立野園子 / 日本福音ルーテル教会 女性会連盟 / 春木イツ子 / 兵藤真里子 / 福地明子 / 古川文江 / 保坂和子 / 南節子 / 牟田青子 / 森保宏 / 森涼子 / 森部信・榮子 / 安田やまと / 山県順子 / 山口敏子 / 山本了 / 良知賢治 / 若原奇美子 / JELC 大岡山教会小学生科

以上、順不同・敬称略。ご支援ありがとうございます。

匿名をご希望の場合は、ご送金の際にお知らせ下さい。

川柳ひろばだより

第13回川柳ひろば入選句発表！

次の三句が選ばれました(柏木哲夫選)。とんちゃんが最優秀に選ばれました。おめでとうございます。

<最優秀句>

☆平社員定年後には自治会長(とんちゃん)

<優秀句>

☆老いほど地球の重力じゃおこなる(うなたらう)

☆ジジとババ子には口出す孫にカネ(茶柱)

以下のような佳作もありました(川柳ひろば管理人選、柳名略)

☆備蓄品母はおなかに貯めている

☆審判と同じ目線でビデオ撮り

☆自分だけわかる句づくりほくそ笑む

☆ハロウィンのようになるのかイースター

川柳は随時募集しています。JELA 事務局 (jela@jela.or.jp) までご投句ください。皆様の作品をお待ちしております。(川柳ひろば管理人 奈良部慎平)



国連で合意された17のグローバル世界共通の目標を「SDGs(Sustainable Development Goals:エスディー・ジー・ズ)」といいます。JELAはSDGsに賛同し、よりよい国際社会の実現に貢献しています。

編集後記

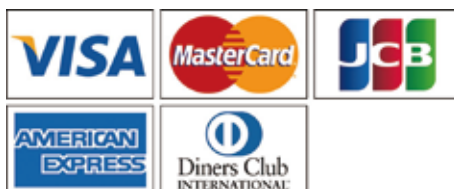
この世界は問題に満ちています。P2 で取り上げた JELA の難民支援事業に限らず、貧困、飢餓、傷病、紛争、犯罪など、根本的な解決策を考えようとすると、もはや人の力ではどうにも解決できないのでは、という閉塞感につきあたります。問題の渦中で苛まれ踏みにじられている生身の人々にとっては、それはさらに強まることでしょう。問題の要因が自己責任によるものでないとしたら、一概に説明しがたい現実が常に私たちの目の前にあります。

キリスト者は、この世の事象のすべてが全知全能の神の御心(みこころ)によるものだと思っています。そして、御心にはいわゆる「消極的御心」があるという理解によって、神がいたずらに人に苦難を与える方ではないという、神への信頼があるのです。人が苦難にあう時、神はその人以上に苦しみながら、それが起こることを許容される

のです。なぜなら、聖書によれば、神はその人が乗り越えられないような苦難を決して与えないし、苦難を乗り越えた時の姿をすでにその人の中に見いだしておられるからです。苦難は試練という神からのプレゼントでもあるのです。苦難の中にある人々を支援する公益事業をしても、宗教の相違や状況によって、必ずしも毎回このことを伝えられません。それでも、JELA は公益事業へ従事することを通して、伝えるチャンスを作り続けるのです。苦難は、神がその人を見捨てたということではなく、むしろ、神に立ち返る道をしめすための消極的方法であるということ。この世のすべての問題に対する最終的な解決策を神がもっておられることを。そんなグッドニュースを伝えることが、神が JELA に最もしてほしい「公益」事業なのかもしれません。

(渡辺 薫)

JELAの活動にご支援を！
各種献金のご送金は下記をご利用ください。



ホームページからクレジットカードでご寄付いただけます！

JELA
Japan Evangelical Lutheran Association

一般社団法人日本福音ルーテル社団
〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-20-26
Tel.03-3447-1521 Fax.03-3447-1523
Email: jela@jela.or.jp
HP: http://www.jela.or.jp
郵便振替口座番号: 00140-0-669206
加入者名: 一般社団法人日本福音ルーテル社団